様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０３０８

研究課題名（和文）ドイツ文学にみる非身体的・非物質的なるものと身体との接続と交錯の文化史

研究課題名（英文）Cultural history of the relation between the body and the incorporeal in German literature

研究代表者
田邊　玲子（Tanabe, Reiko）

京都大学・人間・環境学研究科（研究院）・教授

研究者番号：８０１８８３６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,100,000円、（間接経費）　930,000円

研究成果の概要（和文）：この間「身体」が頻繁に議論されてきたが、非身体的なものの側面、とりわけ身体的なものと非身体的なものが交錯する領域が見逃されてきた。本研究は、ドイツ文学における身体と非身体との関連を研究した。キリスト教神学における身体と魂との関連、古代から現代の西欧哲学における模倣と身体存在についての言説、18世紀のヴィンケルマン、ヴィーラント、ゲーテ、そしてシルエットと影絵芝居の流行の美的内包について検討し、さらに、声、とくに1920年代の現代オペラにおける非主体化について考察した。本研究の成果は、身体的なものの不在といった、現代文化の特徴的な状況の解析に寄与するだろう。

研究成果の概要（英文）：There have been many discuttions about the "body", but one aspect, the incorporeal, especially the area where corporeal and incorporeal cross each other, has rarely gained the focus of interest. In our research project, we analyzed the relationship between the corporeal and incorporeal in German literature. Starting by studiying the relationship between body and soul in Christian theology, we then analyzed the discourse of mimetic behavior and bodily existence in Western philosophy from the ancient to the modern times. We considered also Winckelmann, Wieland, Goethe and the aesthetical implications of the rise of silhouettes and the shadow theatre of the 18th century. Finally we examined the voice in modern opera, especially its function of desubjectification during the 1920s. The results of our research would be a contribution in the examination of such phenomena as the disembodiment as a characteristic predicament of modern (and postmodern) culture.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：独文学

１．研究開始当初の背景

１）過去二十年の間、カルチュラル・スタディーズにおいては、「身体」について頻繁に議論されてきた。その反面、見逃されてきた側面がある。非身体的なものである。西欧の身体観には、とりわけキリスト教の伝統の影響下、精神と身体、不可視なものと可視的なものという二元論、さらには精神の身体に対する優位、というヒエラルキーが深く関与してきた。その一方で、近代の解剖学や生理学の発展にともなう身体の機能と意味の見直しにより、身体が内面を規定するという生物学決定主義も生まれた。ともに、精神と身体は一方が他方を規定するような、明確に分離した異なったものとして捉えている。そうした二元論は、たとえば身体が男性あるいは女性というジェンダーの内面および精神性を規定する、あるいは逆に、抽象的ジェンダー秩序観が身体を形成する、といったジェンダー形成をめぐる議論などに認められる。さらに、近年ドイツでハーバーマスと神経生理学者たちが意志の自由について交わし大きな反響を呼んだ論戦にも、精神と身体との二元論思考とその優位を争う思想が色濃くうかがわれる。神経生理学者たちが、人間が何らかの決定を下す時には体内の生理化学反応がすでにそれを決定しているのであって、自由意志に基づく決定というのは幻想にすぎない、と主張したのに対してハーバーマスが、身体から独立した自由意志の存在を主張して反論したのである。こうした論争が生じる背後には、身体から明確に区別される、非物質的な「精神」なるものがそもそも存在するのか、という根源的な問いが隠されている。たとえばゲルノート・ベーメは、「雰囲気」という概念を用いて、精神と身体との関連を捉え直そうとしている。

２）他方、現代アートの領域を起爆点として、「精神」に代表される非物質的／非身体的なるものを捉え直そうという機運も生まれつつある。1985 年に開催された、リオタールの共同企画になる『非物質的なるものたち Les Immatériaux』点が一つの出発点である。これに触発されて、フランスの哲学者アンヌ・コークランは、『非物質的なものとの交流』（2006、独訳 2007）を著し、「身体的／物質的なるもの」と「非身体的／非物質的なるもの」とを、従来の心身二元論の枠組みを離れて捉え直し、新たなる「非身体的／非物質的なるもの」の美学を提案している。その際コークランが参照しているのは、ストア学派の非物質性概念である。魂、精神といったものは、それが身体に影響を及ぼし身体を形作る以上、身体／物質であるのに対し、「非身体的／非物質的なるもの」とは、場 Ort、時 Zeit、空 Leere、表現されうるもの lekton / das Ausdrückbare の４つである、という。これらの概念を用いることによってコークランは、インターネットを用いたサイバースペースにおける芸術の評価を試み、サイバー・アートとは、個々人がアーティストのホームページにアクセスするその時、その場で一時的に立ち現れる接続面（インターフェース）において、双方向の働きかけによってはじめて表現として実現されるものだとする。本研究は、このような非身体的・非物質的なものの概念と、「接続面（インターフェース）の詩学」に大いなる示唆を受けている。

３）西欧の伝統的身体観と現代のメディア・アートの非身体性の関連を扱ったドイツ文化・社会史研究としては、たとえばディートマー・カンパーの『不在の美学　－　身体間の距離　Aesthetik der Abwesenheit. Die Entfernung der Koerper』（1999）や、クラウディア・ベンティーンの『皮膚　Die Haut』があげられる。とくに後者は、境界／接触面としての皮膚という物質が非物質化されて、現代アートの「遠隔接触 Teletaktilitaet」へと展開する様を、文学や芸術を分析して描き出し、身体と非物質的なるものとの接続という視点を提供する。両者ともに画期的な研究であるが、その根底では伝統的な精神と身体の二元論が受け継がれている。

２．研究の目的

１）本研究は、「身体」が頻繁に議論されてきたなかで見過ごされてきた「非身体的なもの」という側面に注目し、ドイツ文化、とくにドイツ文学において「非身体的なるもの」がいかに扱われ、表現されてきたのかを検討するものである。その際、「非身体的なるもの」を「身体」の否定と定義すると、従来の二元論的観点にとどまることになってしまい、身体的なものと非身体的なものが交錯する領域を無視することになる。「背景」で触れたコークランの提案は、新しい切り口として注目される。すなわち、まず１）「非身体的／非物質的なるもの」を捉え直し、その上で、２）「非身体的／非物質的なるもの」と「身体的／物質的なるもの」とが接続し交わる場に現れ出てくるものを分析し考察する観点であり、本研究はそれに注目するものである。そうした視点のもと、本研究は、ドイツ文化、とくにドイツ文学における身体と非身体との関連について、この広大な領域の一端なりとも明らかにすることを目的とする。

２）本研究は三名のメンバーで行う。トラウデンはキリスト教思想および、中世のドイツおよび中欧の宗教劇を、クラヴィッターは 19, 20 世紀のドイツ文学・文化研究およびポストモダン文学理論を、田邊は 18，19 世紀のドイツ文学における人間観と身体観を中心に研究を進めてきた。その過程においてそれぞれに、身体と非身体的／非物質的なるものとの関係、という問題とつねに対峙せざるをえなかった。キリスト教中世においては魂と肉体の関係をめぐる資料は無数にあり、近代以降のドイツ文学においても、精神と身体、内面と外面、あるいはドッペルゲンガーや幽霊、心霊現象などの非身体的現象を主題とした

作品は数多く、研究もさまざまになされている。しかし、心身の対立や心霊現象等の解釈が試みられてきたものの、身体／物質と精神／非物質というように、二元で捉えられた概念が実際に指し示しているものについては、伝統的な通念に依拠し、そもそも非身体的／非物質的なるものとは何なのか、という根本的問いが立てられずにきたため、結局は従来の二元論を再生産し、二元論から脱却できるような、身体／物質と精神／非物質を接合するもの、その接続面に立ち現れるものに対する視点が脱落していた。
３）それに対して本研究はまず、ｉ）ストア、ネオプラトニズム、グノーシスという西欧の三つの伝統的思想を再確認し、「非身体的／非物質的なるもの」と、「身体的／物質的なるもの」の概念を洗い直した上で、ii）中世および近代のドイツ文学において、その伝統の受容を跡づけるとともに、iii）身体／物質と精神／非物質を接合するもの、その接続面に立ち現れるものを表現するようなテキストを探求し、非身体的／非物質的なるものの、身体との接続と交錯の文化史的研究を目的とする。それにより、身体性をめぐる研究の新たな視点を提示したい。

３．研究の方法
１）非身体的／非物質的なるものと身体的／物質的なるものに関する西欧の伝統的思考の基盤として、ストア学派、ネオプラトニズム、グノーシスの三つの思想の基本を確認する。こうした思想を哲学的に研究するのが目的ではなく、あくまでも西欧文化の根本思想としてその概要を理解し、三名のメンバーの共通基盤を作り、非物質的なるものについての概念および、身体的／物質的なるものと非物質的なるものとの接続との視点から、研究会をもって基本的文献を読み、検討し、本研究の共通基盤を作る。
２）メンバーがそれぞれの領域で関連資料を集め、研究会において紹介もしくは研究発表をする。メールでの意見交換も積極的に行う。
３）メンバーがそれぞれドイツにおいて資料調査・収集をするとともに、ドイツの研究者と学術交流を行う。
４）論文にまとめられる程度の成果が出た場合には、学会誌等に発表する。
５）研究の中間成果発表として、平成 24 年度の日本独文学会秋季研究発表会で、メンバーを含むシンポジウムを開催する。
６）このテーマについて、幅広く意見を募り、研究を活性化するため、原稿寄稿方式でのワークショップを開催し、良い成果が得られた場合には、論文集の発行を検討する。

４．研究成果
〈ドイツ語でのシンポジウム開催〉
Zwischen Körper und Unkörperlichem 身体と非身体的なるものとのあいだ
　日本独文学会秋季研究発表会　2012 年 10 月 13 日　於　中央大学
１）古典古代後期から中世のスコラ学に到る、聖書およびキリスト教神学論を検討し、魂と身体からなるという二元論的人間観において、非身体的かつ不死とされ、空間的広がりを持たないとされた魂が、魂とは無関係に存在し空間的位置を占める身体と、いかに関連づけられるかが、神学上の困難な問題であった。さらに、魂は死後、身体的苦痛を覚えうるのか、あるいは復活後の肉体がどのようなものでありうるのか、ということも論じられた。後者の問いはスコラ学における天使、悪魔、悪霊（＝堕天使）についての議論と関連している。すなわち、こうした存在がいかほど身体性を持ちうるのか、あるいは持たないのか、という点である。また、ミサ聖祭におけるパンと葡萄酒の「全実体変化」という問題がある。これは、外的現れの変化なくして生じるものとされる。こうした問題領域は、ヨーロッパ文化における非身体的なものを理解するための重要な基盤であり、近代の非身体的なるものの言説の背景にあるものである。

２）非身体的なものの研究にとって、影はとりわけ興味深い現象といえる。というのも、影はつねになんらかの身体／物質に依拠しているが、それ自体は非身体／非物質的である。文学史上、影のモチーフはとりわけシャミッソーのペーター・シュレーミールの物語を中心に、すでに数多く論じられているが、それに引き替え、影絵芝居はほとんど注目されてこなかった。18-19 世紀のテキストや、文学誌、文芸批評誌などからの上演記録などを資料とし、感傷主義の影絵芝居（ヤコービ、ミヒャエリス）、市民の私的上演（ビュルガーの『レノーレ』の演劇化）、宮廷芝居としての影絵芝居（ゲーテの 32 歳の誕生日にヴァイマールで上演された影絵芝居『ミネルヴァの誕生、生と行為』）、政治的風刺の影絵芝居（ブレンターノ）ロマン派の影絵芝居（ケルナー）などを取り上げ、非身体的／非物質的なものと身体的／物質的なものの交錯する場としての当時の影絵芝居というジャンルの美的意味とメディア性を明らかにした。

３）ベンヤミンには、『ミメーシス能力について』『類似論』（1933）といった、ミメーシスについての考察がある。そのさい、模倣にとどまらず、根本的な原能力が問題となっている。そのとき、ミメーシス的振る舞いの基盤を提供するものとしての、身体存在としての人間が前提とされている。しかしそれは、理論の優越を逃れるため、問題となる。ベンヤミンは身体を「最古の模倣」の「唯一の物質」としている。そうした点から、ミメーシスおよび身体についての新たな理解を得ることができた。

４）Das Ästhetische という概念を、語の根

源的な意味における感官による知覚としてとらえるならば、ゲーテのファウスト第一部における夜の場面の地霊の出現は「ästhetisch」である。そうすると、地霊を身体性・非身体性との関連で、いかに理解すべきか、という問題が生じる。その雰囲気的な出現のさい、霧や光、火といったものが、重要な役割を演じている。この地霊については研究史上さまざまに論じられているが、この地霊像を検討することにより、古典古代以来、感官で知覚可能な霧、光、火といった現象をとらえてきたプネウマもしくはスピリトゥスの概念が、ドイツ語のガイストという語に継承されていることを明らかにした。

５）ロマン派のオペラでは、歌手の声は、歌手もしくは登場人物の身体の存在を示す聴覚的記号ということができる。声は、聴衆にテキストを聴取可能にするのみならず、登場人物の情動や激情を音楽的に表現する機能を担っている。しかし、このような声の美学は 1920 年代、とくにパウル・ヒンデミットやクルト・ヴァイルのオペラ作品で変化した。また、当時大きな影響力を有していた音楽批評家パウル・ベッカーは、歌手の声は登場人物の性を示すという機能を失い、声本来の音の自然性に立ち戻るべきだと主張した。このような、声の脱主体化の要請を、新即物主義における身体観との関連で明らかにした。

〈論文〉
６）18 世紀の人間学の言説のなかで、人間はキリスト教的心身二元論に基づきながらも心身が一体となった「全体としての人間」として考えられる度合いが強くなった。博物学の発展のなかで、リンネの分類が示すように、人間と猿（動物）との類似性が指摘されるなかで、人間の非身体的／精神的特質の優越が強調されると同時に、いかに人間の身体が動物（猿）よりも美しく優れているか、さらには人種について、いかに「白人」が「黒人」よりも「人間性」を示す身体部分について優れているか、といった議論が展開された経緯を跡づけた。そのうえで、ヴィンケルマンが古典古代の受容のもとに改めて打ち出した、美しい身体に美しい精神が宿る、という心身一致の人間観が、たとえば体操普及運動の創立者の一人であるグーツムーツにおいては、外面を内面の現れとするような、非身体的なものが身体を形成するというものではなく、むしろ、美しい身体が美しい精神を形成する、身体的なものが非身体的なものを形成する、という思考型に反転してゆく様を明らかにした。

７）20 世紀の作家、詩人であり、文学研究者でありマックス・コメレルが、中国の水墨画などから示唆を得て書いた詩における中国の美学の影響を検討し、「白い影」という概念を手がかりに、西洋の物質性と非物質性という二元論を越え出る可能性をいかに表現したかを明らかにした。

〈ドイツ語論文でのドイツ語によるワークショップ〉
Zwischen Körper und Unkörperlichem 身体と非身体的なるものとのあいだ
2013 年 3 月 16 日　於　京都大学
８）ドイツ語での論文をつのり、参加者がそれらの論文を事前に読んだ上で、それぞれの論文についてドイツ語で議論する、という形式でのワークショップを開催した。
シラーにおける此岸の不完全性の補完としての非身体的あらわれ、アドルノの映画論における「幽霊のようなもの」、カフカにおける心霊主義、言語学からみた身体と非身体のインターフェースの問題、ユダヤ教（徒）の身体、フロイトの欲動論にみる身体と非身体との境界としての欲動、コレラ、リュッケルトの『亡き子をしのぶ歌』にみる死者の代替としての詩の身体性、トルコ出身のドイツ語作家における影の問題、文学における影の問題、ミメーシスと肉体、非身体的な音としての声という、15 本の論文が寄せられ、国内外から 17 名がワークショップに参加して、議論を交わし、この問題領域についての理解を深め、この問題領域の豊かさを認識した。
　このワークショップをもとに、原稿の集まり具合により可能な場合は、ドイツでの国際論文集の出版を検討することとし、当日ワークショップに参加できなかった投稿者にも、議論の概要（批判点、修正意見等）を伝え、2014 年 8 月 31 日締め切りで、完成稿の送付をつのった。集まった原稿およびシンポジウムの発表原稿について慎重に検討を重ねた結果、テーマがあまりにも分散しすぎており、また全体としての本数も不足しているため、残念ながらドイツでの出版は時期尚早だという結論に達した。しかしながら、本問題領域の多様性が具体的に明らかになったことは大きな収穫であり、今後改めて問題点を絞った上でのプロジェクトが必要とされることが認識された。

〈その他〉
９）ドイツ最初の近代小説と言われるヴィーラントの『熱狂に対する自然の勝利、もしくはドン・シルヴィオ・フォン・ロザルヴァの冒険、摩訶不思議なことがすべて自然に進行する物語』（1764）は、シャフツベリの Test of Ridicule を物語の展開原則としたものである。クリスチアン・ヴォルフ、ゴットシェト、ボドマー、ブライティンガーなどの想像力をめぐる議論など、文芸についての当時の議論も組み込まれている。この作品はまた、ヴィーラント自身の、非身体的プラトニズムから身体性、経験論への転機を示すものともされる。この一見荒唐無稽な小説には、啓蒙時代の作品らしく、迷信の幽霊像の科学的説明がなされるなど、当時の自然科学の知見も鏤められ

られている。この作品には「身体をもった霊 die cörperlichen Geister」という語が用いられる。これは具体的には身体的存在の形をとって出現する迷信像を示すのだが、それ以上に、非身体的・非物質的存在といかにかかわるか、という近代の問題意識が見て取れる。そのなかで、非身体的・非物質的世界と身体的・物質的世界とのインターフェースとして、知覚、想像力（の座としての頭、脳）が大きな役割を演じていることが明らかになった。さらに、シンパシーという、非身体的・非物質的交感能力に、この作品ではなお、重要な意味を持たされていることで、身体存在と非身体的能力の問題性が語られていることが明らかになった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①田邊玲子、魂から身体への反転　－　18 世紀における人間・動物・人種をめぐる言説　－ドイツ文学　144 号　2012、　1-18

②Klawitter, Arne: „Kein Umriß – nur ein weißer Schatte“. Fernöstliche Ästhetik in Max Kommerells Gedichten *Mit gleichsam chinesischen Pinsel*, in: *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literatur-wissenschaft und Geistesgeschichte* 88/1, 2014, 95-111

〔学会発表〕（計２件）
①Dieter Trauden, Aspekte des Unkörper-lichen im christlichen Denken

②Arne Klawitter, Das Schattenspiel als dramatisches Genre in der deutschen Literatur、

以上、学会にて開催したシンポジウム『Zwischen Körper und Unkörperlichen（身体と非身体のあいだ）』、日本独文学会秋季研究発表会　2012 年 10 月 13 日、中央大学

他の発表は、
③Dan Morita, Mimesis und Leib – Walter Benjamins Theorie der Nachahmung
④Jin Nakamura, Klang des Unkörper-lichen – die Stimmästhetik der Oper in der Neuen Sachlichkeit, besonders der Opern von Paul Hindemith und Kurt Weill in den 1920er Jahren
⑤ Yuho HIisayama, Das Ästhetische zwischen Feuer und Erde. Zur Un/Körperlichkeit des Erdgeistes in Goethes Faust I

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
田邊　玲子（TANABE, Reiko）
京都大学・大学院人間環境学研究科・教授
研究者番号：８０１８８３６４

(2)研究分担者
トラウデン ディーター（TRAUDEN, Dieter）
京都大学・大学院人間環境学研究科・外国人教師
研究者番号：２０５３５２７３

クラヴィッター アルネ（KLAWITTER, Arne）
早稲田大学　文学学術院　教授
研究者番号：　９０４４４７７８